

---

# 少女と魔物のタランテラ

ライムギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女と魔物のタランテラ

### 【Nコード】

N8652Y

### 【作者名】

ライムギ

### 【あらすじ】

少女は逃げる。魔物は追う。

追って、捕まえて、そうしてまた逃がす。繰り返されるそのやりとり。

それでも少女は逃げ続けることを選択する。

そんな2人の物語。

けっこう流血描写が多いかもしれません…。

ものすごくマイペースに更新予定。

## 1 (前書き)

ご来訪いただきましてありがとうございます。  
けっこう流血描写が多いかもしれません。ご注意ください。

早く、早く！

風よりも早く、音よりも早く、光よりも早く！

万の願いを込めて、駆けて、駆けて、駆け抜ける。

だがそれでもアニョーゼは手遅れだとわかっていた。すでにそれは、すぐそばまで迫ってきている。

アニョーゼが必死の思いで踏み抜いた土を軽々と越え、傷をたくさんつけながら抜けた険しい木々を追い越し、あの空まで飛んでいきたいと思っていた青い天から、降ってくる。

そう、文字通り降ってくる。

地面に落ちる音すらしない。ただひたすら、優雅に、華やかに。

そして絶望をもって。

それは、彼は、枯葉の散る森の広間へ、飛び降りた。

アニョーゼの、すぐそばに。

「やあ、アニョーゼ。退屈だ。実に退屈だよ」

愉快そうにそう言いながら、アニョーゼの方へと近づいてくる。

乾燥した落ち葉を踏みしめているのに、ほんのわずかも音すら立てず。

それでいて、存在感だけは圧倒的な力でこちらへ押し付けてくる。愉快な顔をした青年は、漆黒のシルクハットを左手に、青い薔薇を右手に持って、近づいてくる。

「退屈だ。実に退屈だった」

そう言いながら、美しい白い歯を見せながら、満面の笑みはまるで耳まで裂けるようだった。

目を背後に彼が迫りくる。影が、アニョーゼの深紫の髪を、そばかすの散った白い肌を、貧相な服に包まれた華奢な身体を闇へと導く。

影が、アニョーゼの汚れわずかに血の滲む足へと伸びた時、そっ

と彼女の頭に、シルクハットが乗せられた。

「おかえり、アニョーゼ」

その瞬間、悲鳴を上げる間もなく、少女はその森から姿を消した。

ひたり、ひたりと。

何かが落ちる音に、アニョーゼは目を覚ました。

「ひっ」

だがその瞬間身をこわばらせ、自らを取り巻く棘達に悲鳴を上げた。その声に喜ぶように、棘はその締め付けをきつくし、鋭い刺で青白い肌を刺激した。

ところどころ、すでに血が流れている。

だがその痛みで、アニョーゼはすぐに冷静になれた。

まだくらくらする頭で室内を見回し、そこがいつもの部屋だということを悟った。

蝋の光で艶やかに光る家具、すぐわきに見える天蓋のついた広いベッド。天蓋のカーテンやシーツのモスグリーンが、さらにアニョーゼの思考を整えていく。

そうして再び自分の体を見直し、深く息を吐いた。

（ああ、また捕まってしまった）

目を閉じ、意識を失う直前に見た男の顔を思い出す。白い肌、漆黒の髪、漆黒の服、赤い唇。

本来は整っているだろう造作も、醜悪に歪められた笑みの前では塵も同然だ。

カリエステル。

それがあの男の名前だった。

（カリエステル……）

頭の中で無意識にそう言いながら、アニョーゼはそつと息をついた。下を向けば、棘まみれの下半身と、つま先から滴る血を受ける皿が置いてあった。

白くつややかで、美しい紋様が意匠されたそれは、かなり高級品だろう。

かなり大きな皿だ。深く、広い。アニョーゼが寝ころぶとまではいかないが、おそらく頭は軽く入ってしまいそうだ。首が落ちてても血が床に流れることはないだろう。それほど、深く大きい。

その皿の底のほうにわずかに流れる血の量を見て、アニョーゼはここにきてそれほど時間がたっていないことを理解した。

血の滴る体を見ても、その表情は変わらない。絶望に涙することも、叫ぶこともない。叫ぶほどの恐怖ではない。泣くほどの絶望ではない。

こんなものではないのだ。アニョーゼの知る絶望は。地獄は。

「退屈だった。実に退屈だった」

捕まる時と同じ言葉を言いながら、カリエステルが部屋へと入ってきた。

相変わらず、物音をたてない。開けられた扉の蝶番すら、今は無口だ。足蹴の長い絨毯を踏みしめ、そっと、寝台近くでとらわれるアニョーゼへと近づいてくる。

蝋燭に照らされた影が不気味に揺らめき、少女の顔に闇を宿す。不安に揺れる赤い瞳が、暗く濁った。

そんな彼女の顔を見ながら、カリエステルは喜色をにじませて笑った。薄い唇が耳元まで弧を描き、白い歯が怪しく光った。

「だがもう大丈夫だ」

長く白い指先が、そばかすの散った頬を撫でる。と、瞬間その形の良い爪が伸び、少女の肌突き刺さった。

「っ……」

「だってもう、捕まえた。捕まえた」

「……っ……ああ！」

頬をえぐる痛みになえきれず、アニョーゼは悲鳴を上げた。

のたうてば、そのぶん蔓がきつく締まっていく。柔らかな白い肌に深緑の蔓が突き刺さり、深紅の赤い珠が浮き出、流れ落ちる。

足や腰から流れ落ちる血が、砂時計の砂のようにゆっくりと白い器に降り注いでく。

ひたり。ひたり。

白い皿が、赤へと染まっていく。

痛みからか貧血からか、すでに遠のき始めた意識中、アニーゼは浅い息を幾度も繰り返した。

痛みと吐き気と酸欠に、気が狂いそうだ。

カリエステルは満面の笑みを浮かべながらその様子を眺めていたが、刹那、表情をそぎ落としたように無へと一変した。

耳元まで避けていたはずの口は一瞬にして平らなものとなり、どこか狂気じみた悦楽の空気が、一瞬にして静謐な圧迫感に支配された。

ひっそりと揺れていた蝋燭すら、その動きを止める。

影がぴたりと少女の影に寄り添い、重なり合う。

触れんばかりの距離で、カリエステルはそつと囁いた。

「おかえり、アニーゼ。とても退屈だったよ。玩具がないと退屈だ。次はもつと、近いところで隠れておいで」

深紅に濡れた指先が、そつと優しく、少女の唇をなぞる。影の中だというのに、しつとりと唇はうるおい、紅のようなつやがあった。白い肌に浮かぶ毒々しいまでの艶やかなそれが、あどけない顔でひどく異色だ。

だがカリエステルはその様子に満足げに唇を弛めると、そつと少女の朦朧とした瞳を覗き込んだ。

長い漆黒の前髪から、青磁色の瞳がのぞく。

美しい瞳だった。吸い込まれるような艶があった。輝石のように美しく、しかし見ているだけで雄弁にものを語る瞳だった。

その瞳があるだけで、青年の雰囲気が一変する。ひどく美しい存在となった。

透けるように白い肌に、筋の通った鼻。薄い唇はバラの花のように淡い紅色で、艶やかな黒髪がそつと輪郭を縁取る。

まるで精巧な仮面のような顔に、ただその艶やかな秘色の瞳があるだけで、生気が宿る。すべてを魅了する、美しい魔物へと変化する。

アニョーゼはその瞳を見た瞬間、勝手に目が潤み、血に塗れる頬を涙が伝った。

(最悪)

最悪な状況だった。

全身の血は絞られ、穴だらけにされ、  
頬の肉すらえぐられ。

そのくせ、珍しい男の瞳に身体が勝手に感動して涙する。

最悪な気分だった。

「お帰り、僕の玩具」

(最悪)

また捕まってしまった。

人など、遊べる食料でしかない男のもとに。

幾度逃げても、どこへ逃げても、男は必ず追ってくる。追って、  
そうして手の中へと閉じ込める。

一瞬の悦楽のために。享楽のために。

涙で潤む瞳が、だんだんと霞んでいく。全身が重く、氷のように冷たい。目を閉じれば、そのままこの惨劇は終わりを告げる。

だが、死への不安はなかった。

アニョーゼはあくまで玩具なのだ。壊れてしまえば、意味はない。それは、彼が決して許さないだろう。

目が覚めれば、またいつものように、この惨劇などなかったかのように、傷など一つもない身体で、知らぬ場所に放り出されているに違いない。

(最悪……)

そうして、彼女ができるのは許されたわずかな時間で遠くへと逃げるだけだ。

幾度と繰り返し返される、長い長い鬼ごっこ。決して勝てぬとわかり

ながら、アニーゼはそれでもまた逃げる。

この美しい魔族が、それを望む限り。

魅入られた彼女に、真に逃げきるすべはなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8652y/>

---

少女と魔物のタランテラ

2011年11月25日23時52分発行